

神奈川県における曾利Ⅳ式期の土器様相

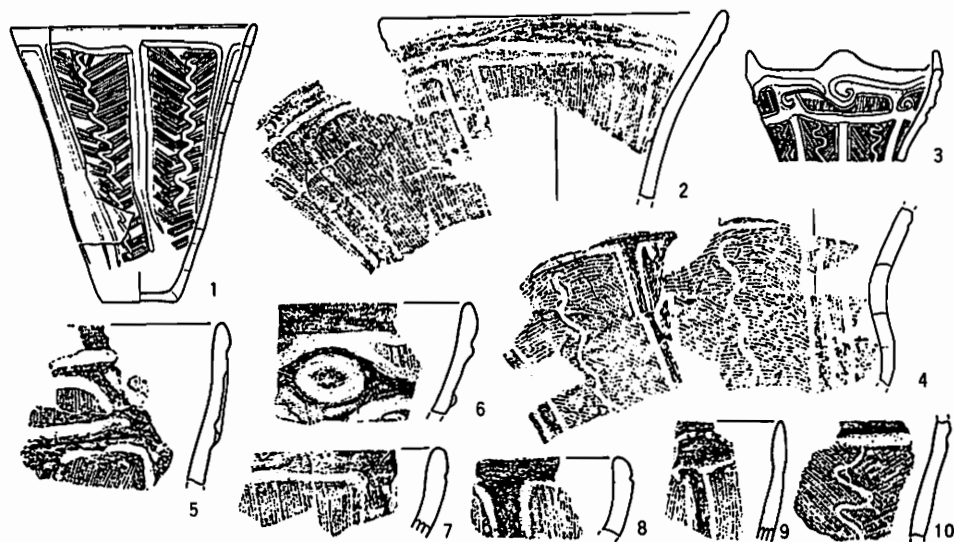
戸田 哲也

1. はじめに
2. 曾利Ⅳ式土器の再確認
3. 山梨県における曾利Ⅳ式と編年
4. 神奈川県における曾利Ⅳ式期の土器様相

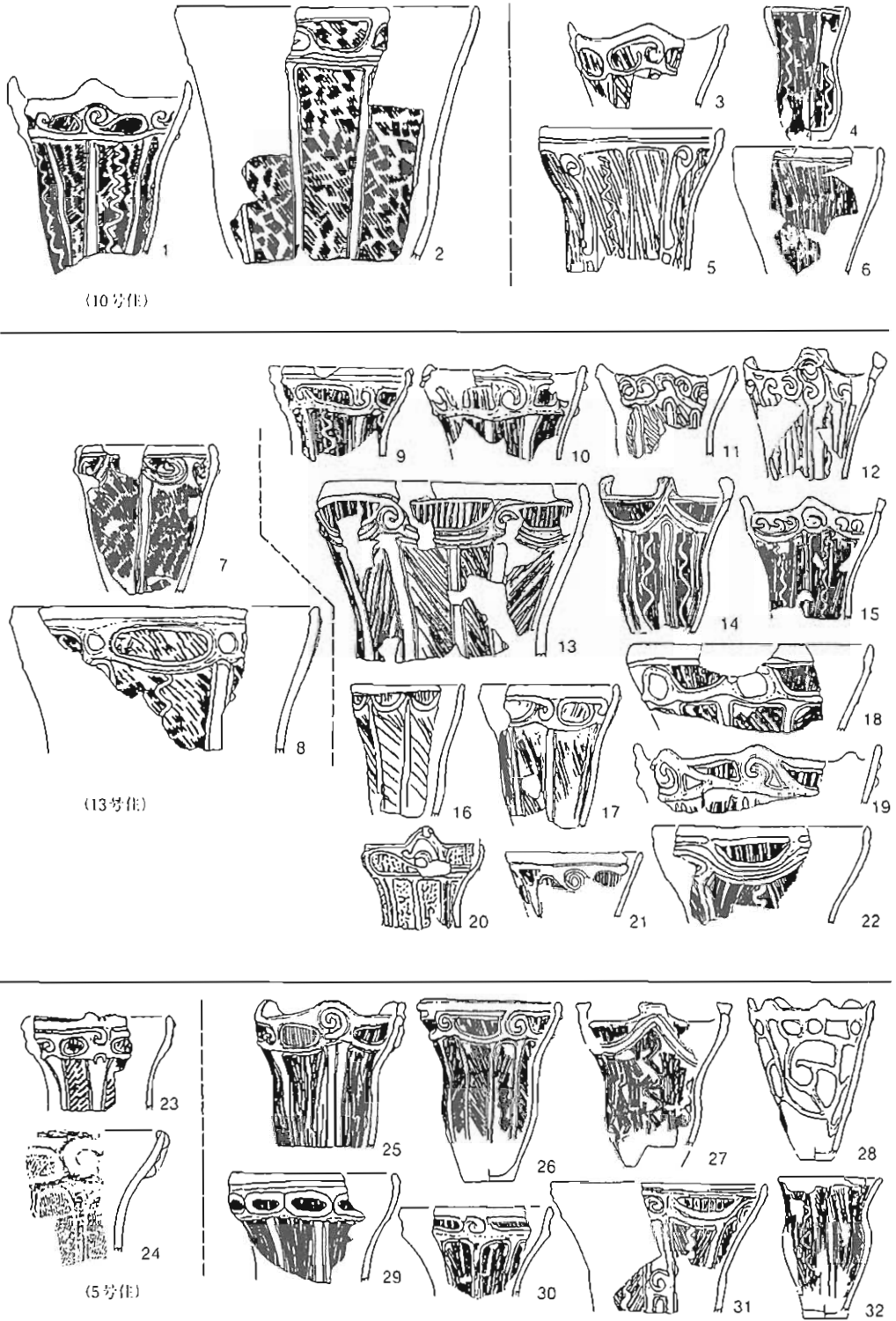
1. はじめに

神奈川県における曾利Ⅳ式土器の存在は、1977年山北町尾崎遺跡の報告において明確に知られることとなったが（岡本ほか1977）、曾利Ⅳ式自体は口縁部文様はほとんど形成されないことも含めて顕著な特徴に乏しく、胴部破片での認定が難しい型式といえる。その後神奈川県内において同型式のまとまった出土資料としては尾崎遺跡を除いてほとんど見ることができず、わずかに県西部に類例が散見される程度であった。

過去神奈川県における中期の集落跡調査は相模川以東に多く、相模原台地、港北台地に集中していた状況であろうが、曾利Ⅳ式の類例は極めて少ない。甲府～諏訪に中心分布を持つ曾利Ⅳ式のあり方から見て相模川以東への分布波及が弱かったとも言えるが、前段階の曾利Ⅲ式、次段階の曾利Ⅴ式はより広く東京西部域までの分布が認められ、加曾利Ⅴ式土器との編年対比がいち早く行われてきた（浅川・戸田1970、浅川・戸田1971、神奈川考古同人会1980・1981）。そのような研究状況の中で曾利Ⅳ式は影にかくれるような存在となり在地系加曾利Ⅴ式土器との目的を持った編年対比が行われないまま今日にいたっているといえる。



第1図 綾瀬市早川天神森3号住出土資料



第2図 相模原市新戸遺跡出土土器 (破線右側が新戸・原山型土器)

今回曾利Ⅳ式土器の問題を取りあげるにあたって県内資料を再検討した結果、綾瀬市早川天神森3号住居址資料（岡本ほか1983）を改めて注目する。第1図に示した土器群中、1は典型的曾利Ⅳ式であり、7～10も同型式と考えられる。2は曾利Ⅳ式に近い文様構成を持つ。3、5、6は口縁部に渦巻状の隆帯文を持ち、区画内は条線文、綾杉状文が描かれ、加曾利Ⅴ式と曾利式の折衷形と呼ばれる土器である（筆者はこれらの土器群に対して、型式学的、編年学的に具体的資料にもとづいた名称が必要と考え、新たに「新戸・原山型土器」を提案した。第2図に示したものは、相模原市新戸遺跡（大上ほか1988）出土の土器群であり、縦破線の右側に分類されたものの主体が新戸・原山型土器となる。その内容については『列島の考古学—渡辺誠先生還暦記念論集—』1998.2 所収の戸田論文を参照されたい）。第1図4は出土量の少ない縄文施文の土器であり、沈線による磨消縄文が施されるが口縁部文様帯があるものと考えられる。新戸・原山型土器（折衷形）及び4の様相からは加曾利Ⅴ3新式と筆者が呼んでいる時期と考えられ、曾利Ⅳ式がこの時期に並行する可能性を示している。

しかし曾利Ⅳ式土器の流入例は他の相模原台地の遺跡では極めて乏しく、早川天神森3号住居址の様相を再検討できる共伴例はその後なかなか出現しなかったのである。本論ではまず曾利Ⅳ式土器の編年観について長野、山梨の標識資料から再確認し、後段において改めて神奈川県域における様相について論じてみたい。

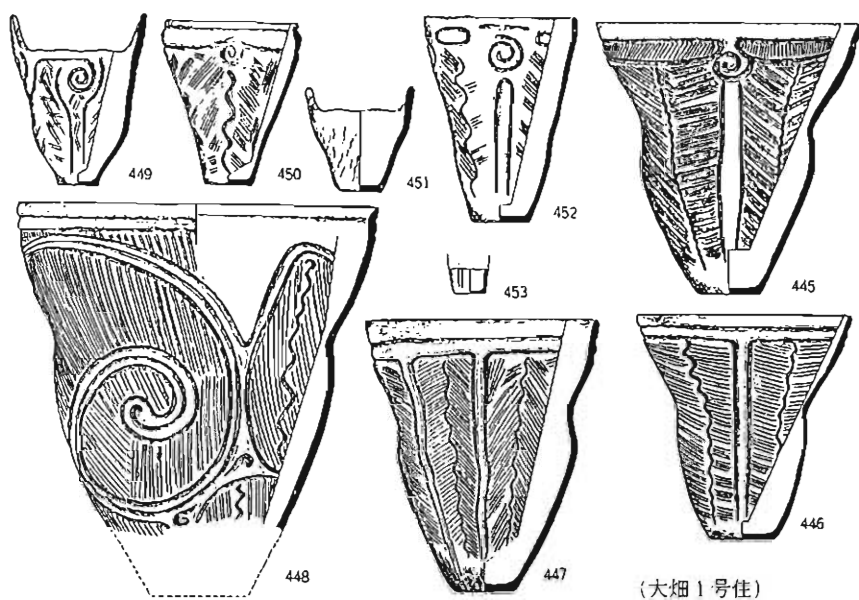
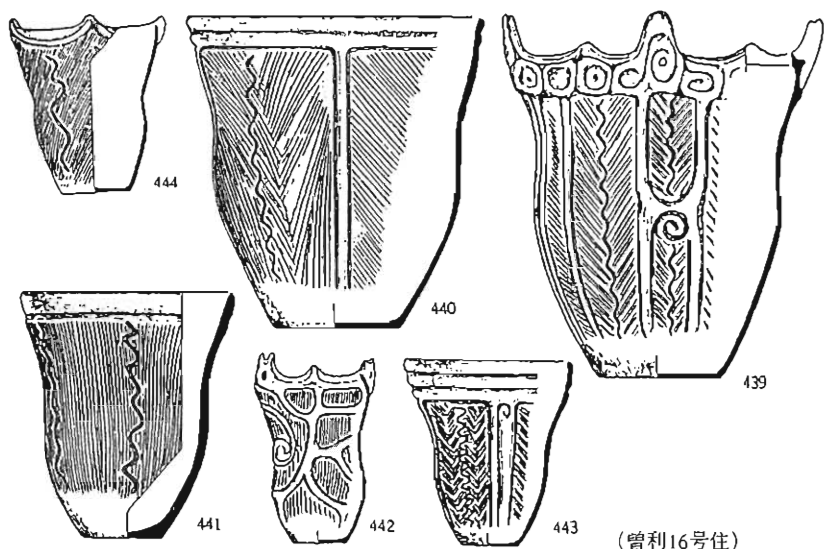
2. 曾利Ⅳ式土器の再確認

曾利Ⅳ式土器は大著「井戸尻」（藤森栄一編1965）において住居址出土資料の提示とともにその型式内容と編年位置が定義された。第3図に示した曾利16号、大畑1号住出土土器をそれぞれ完全なセットとして認識され、土器の特徴を次のように説明された。

①口縁部の縊れは微弱になり胴太のずんぐりとした深鉢になる。②口縁部横帯の渦巻つなぎはほとんど廃され、同心円文、渦文がつなぎまたは孤立する。③口縁部二条ないし一条の凹帯文だけになるものが多い。④口縁部突起が多少みられる。⑤地文条線は刷毛目のようになり、綾杉または斜行となる。⑥懸垂文の曲線は力弱い。⑦全面に大柄な渦巻つなぎ文が施されるものがある。

上記①～⑦の特徴は文様要素の少ない曾利Ⅳ式の内容をよく捉えているが、あえて追加すれば440、443、446、447等に見られる縦位区画が隆帯で表現されることと、口縁部1～2条の凹帯文はその縦位区画隆線の延長（はじまり）として口縁部2条の隆帯と言い変えることができよう。井戸尻に示されたこの2軒の住居址資料の主体となるものは口縁部文様帯の喪失にあり、口縁部横位隆帯と縦位区画の連続性を見るとT字状のモチーフを描くこととなる。

井戸尻報告以来今日まで我々は主としてこのT字状のモチーフに綾杉状沈線（条線）を持つ土器に対して曾利Ⅳ式として認識してきた。その場合に曾利Ⅳ式のセットとされた資料中に見



第3図 曾利IV式標識資料 (『井戸尻』1965より転載)

られる他の文様構成を持つ土器をどのように捉えるかが問題となる。前時期からの文様の残存と見るべきものもあろうし、439のように前時期からの残存（あるいは混入）個体と見られるものもあるのである。曾利IV式の単純化した型式学的特徴はあくまで口縁部文様帯の喪失にあらうが、曾利IV式期を構成する土器群中には前時期からの残存形態として口縁部文様帯が認められる土器が一定量存在すると考えるのが自然であり、444, 445, 452そして442, 448のような存在を再確認する必要ができた。前述の早川天神森3号住の様相を考えるうえでこのような観点を喚起しておきたい。

3. 山梨県における曾利Ⅳ式と編年

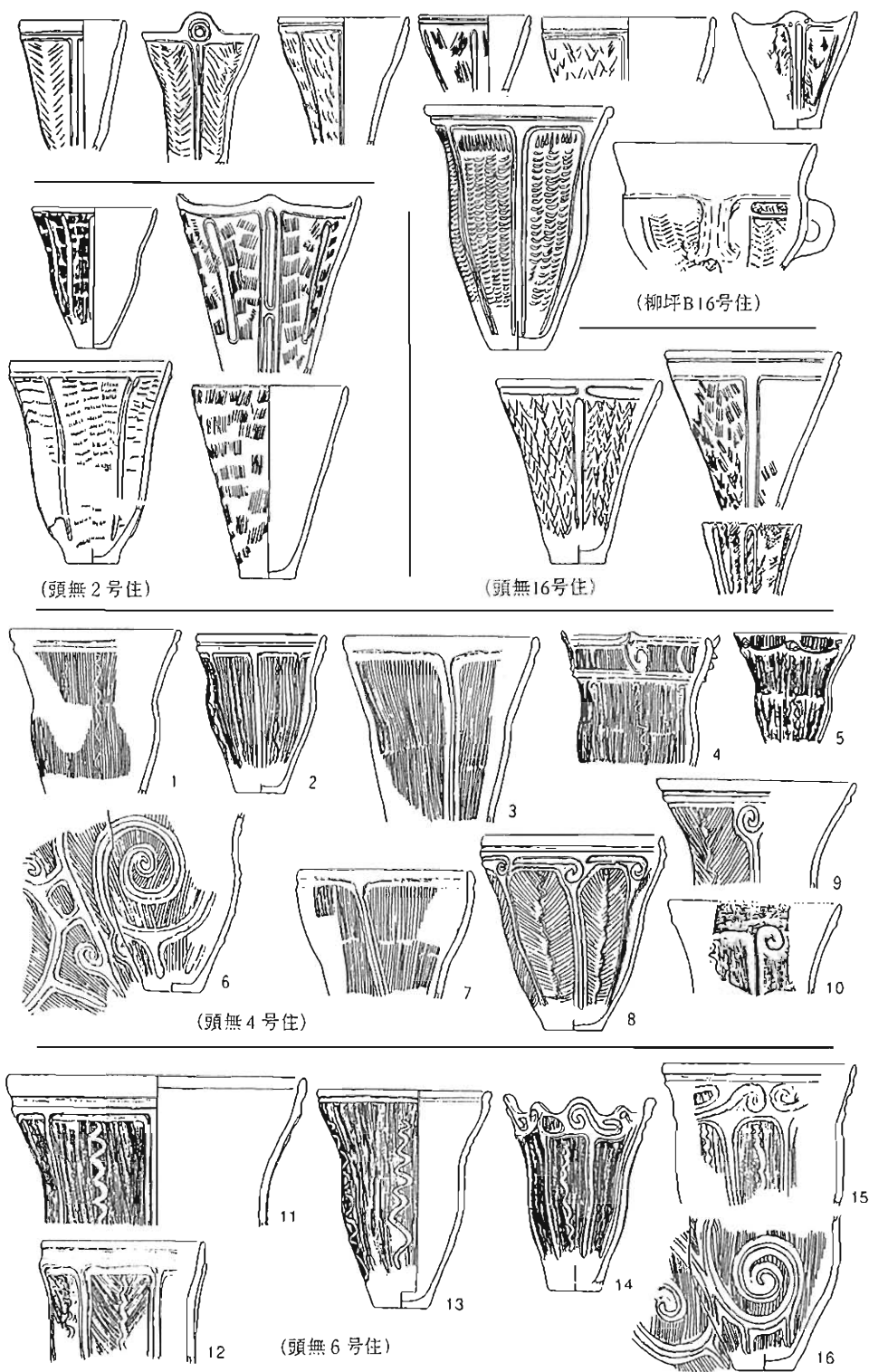
曾利式土器の中心的分布域である山梨県では、第4・5図に示した頭無、柳坪遺跡の良好な資料が存在する（末木1975）。頭無4号住、6号住の資料はともに曾利Ⅳ式期のセットを成すと考えられるが、6、16に見る大形の渦巻文が胴部全体に展開する土器は、曾利Ⅲ式からの文様を継承しているようであり、4、5、14は口縁部文様帯を認めることができる。これら前時期に認められる文様を持った土器群は現在のところ単体で出土した場合に曾利Ⅳ式期と認定することは大変難しいが、曾利Ⅳ式標識資料にも見たように、一定の割合でこのような資料が曾利Ⅳ式のセットに加わる蓋然性が高い。したがって曾利Ⅲ式からⅣ式への時間幅の中で、口縁部渦巻文、胴部渦巻文を持つ土器の微妙な型式学的変化を改めて注意する必要がある。頭無4号、6号の4、5、14の場合、口縁部の渦巻状文の突起が微弱となり口縁部の段と厚さが見られなくなる特徴をあえて指摘しておきたい。おそらくこの種のものが、新戸・原山型土器（折衷形）と呼ぶものに一部含まれると考えられるのである。

頭無4号、6号の中で注目されるものが、8～10、15に見る口縁部に施される渦巻つなぎ文であろう。大畑1号の445、450、452、449にも類似した文様が認められる。すでに口縁部文様帯は1条の沈線あるいは隆帯に変化している。このような文様配置は前時期の口縁部横位渦巻文の下降と見るか、胴部渦巻つなぎ文の上昇と見るか両者が考えられるが、いずれにせよ単純化する曾利Ⅳ式のT字状文様への変遷過程におかれるような文様となる。この種の文様は尾崎遺跡にも特徴的に見られ、曾利Ⅳ式の標識的特徴に加わることを確認しておきたい。

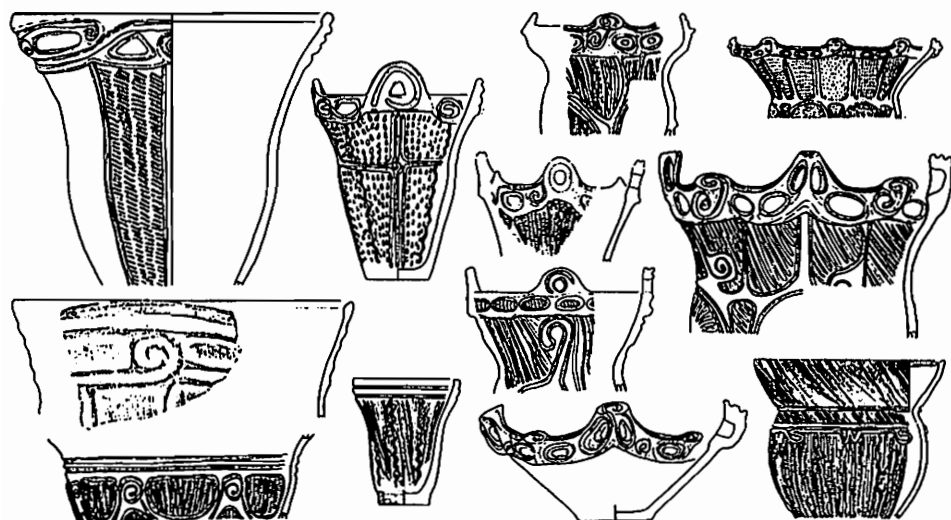
さて頭無、柳坪の集落跡は、曾利Ⅳ式前後の時期が存在しており、小地域での土器型式変遷を見るのに適している。第4図上段に示した頭無2号、16号、柳坪B16号住の各資料は口縁部から続くT字状の沈線区画文と内部を埋めるハの字状文、櫛歯による刺突文が顕著な特徴となり曾利Ⅴ式の好資料といえる。なお頭無16号に1個体認められる逆U字状磨消縄文土器は筆者の言う加曾利E4古式に属するものであり曾利Ⅴ式との並行関係を示す。

曾利Ⅳ式からⅤ式への変遷に関して図示していないが、口縁部及び胴部縦位の文様区画がT字状の隆帯により表出され、区画内にハの字状文を施す例が、頭無1号住、居平2号住（『井戸尻』）など各地に存在する。T字状の隆帯区画は曾利Ⅳ式の特徴であることは前述したが、ハの字状文との組み合わせが、曾利Ⅳ式期における出現なのか、曾利Ⅴ式期での隆帯手法の残存と見るかは今後の課題となるところである。

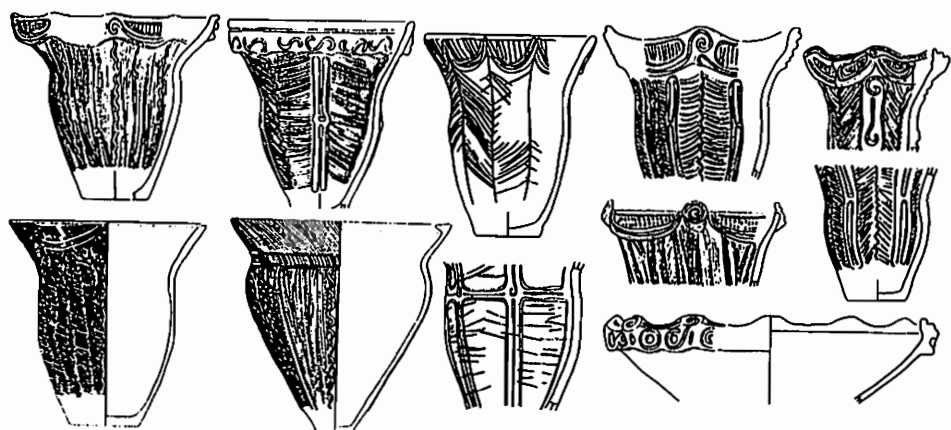
前述のように頭無、柳坪の集落跡では、曾利Ⅳ式前段階に属する住居址も多く発見されている。第5図に示した資料中の頭無9号住、柳坪A8号住では、曾利Ⅳ式を伴わず口縁部渦巻文、横位区画帯が見られ、曾利Ⅲ式段階ではあろうが胴部の綾杉状文がすでに定着した文様となって認めることができる。一方同図に示した頭無7号住資料では綾杉文はみられず、また胴部文様は胴くびれ部を境として縦横に区画するもの、胴部前面に渦巻つなぎ文が展開するものなど



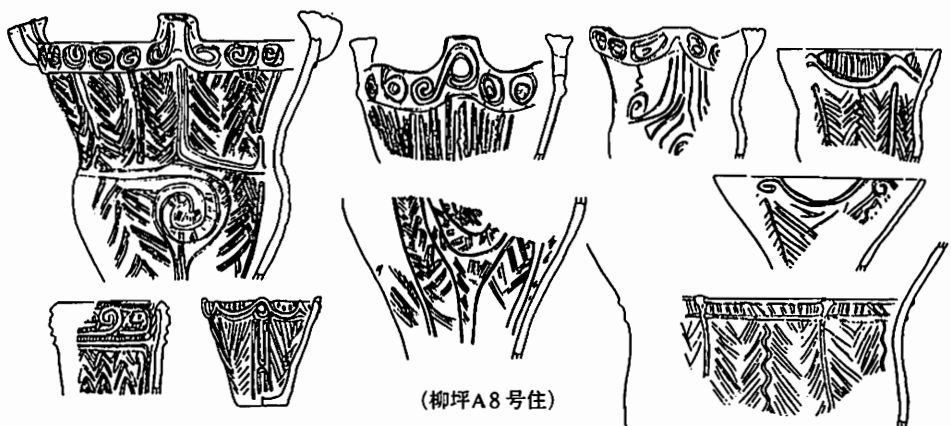
第4図 山梨県頭無・柳坪遺跡出土土器群(1)



（頭無 7 号住）



（頭無 9 号住）



（柳坪A8 号住）

第 5 図 山梨県頭無・柳坪遺跡出土土器群（2）

が見られる。口縁部文様を見る限りではこれらの住居址間には大きな差はなく、いずれも曾利Ⅲ式の範疇となるが、綾杉状文の存在が次時期への接近を示すと考えれば、頭無7号が多少古く位置づけられることとなろう。曾利Ⅲ式内での時間的、型式学的変遷が今後の問題とされ、この点は先にも述べた加曾利E式、曾利式折衷形土器の変遷観と同様の問題となる。一応第4図、第5図で示した編年案を山梨県域における研究上の骨組みとして捉えたい。

4. 神奈川県における曾利Ⅳ式期の土器様相

山北町尾崎遺跡は酒匂川上流の西丹沢山地深く入った位置にあり、静岡県駿東郡、山梨県南都留郡の各県境に近い。遺跡の地理的位置関係から、神奈川県内としては現在のところ唯一に近いまとまった曾利Ⅲ式、Ⅳ式土器を出土している。1976年に調査されたこの遺跡は、4m近くの新期富士降下火山灰層に厚く覆われ、縄文後期前半以降の激しい富士火山活動を知ることができる。

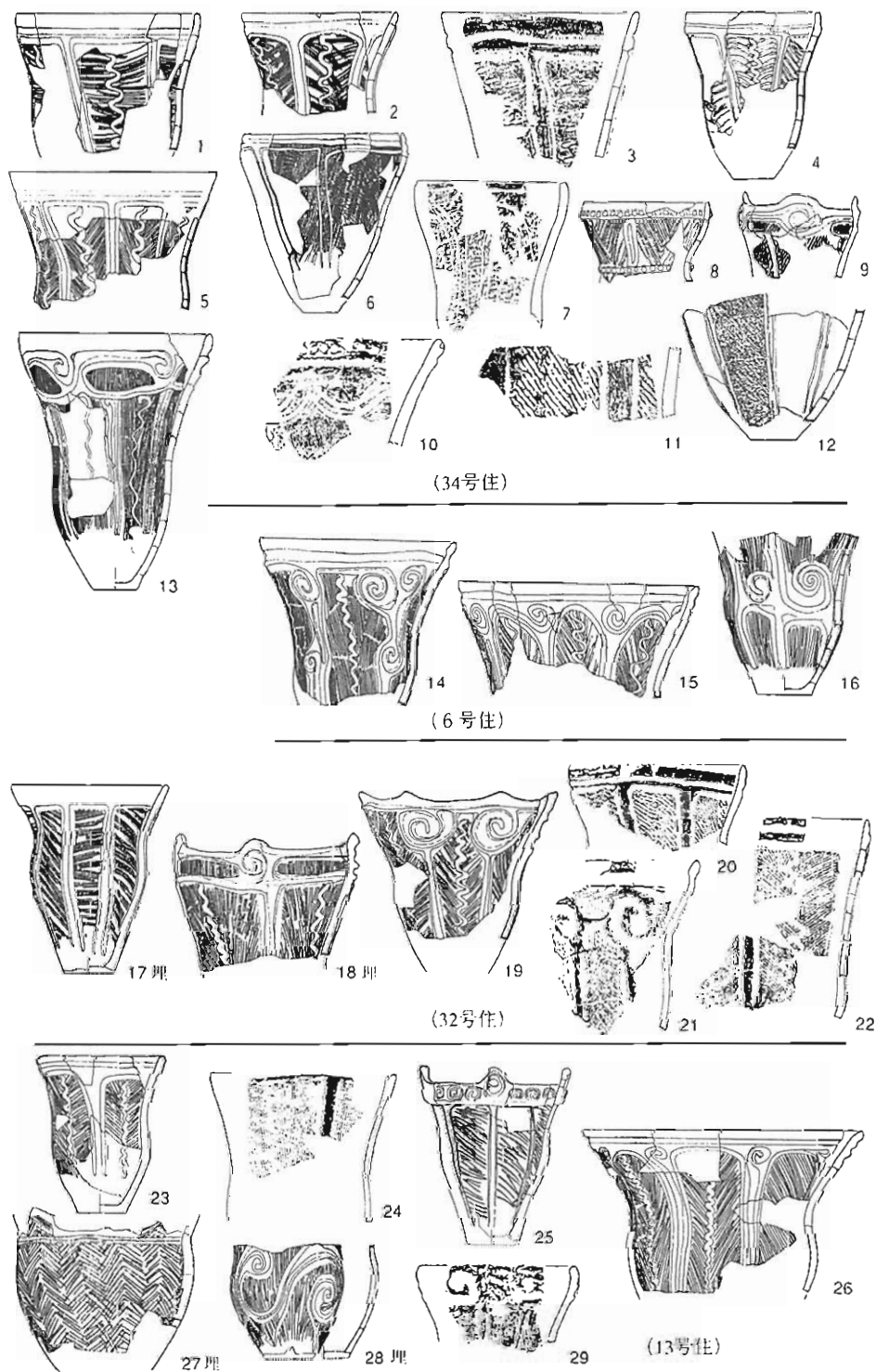
第6図に示したものが尾崎遺跡の住居址出土単位での曾利Ⅳ、Ⅴ式土器群である。

曾利Ⅳ式の最も良好なセットを示すものは34号住居土層中の土器群であり、13の埋甕との一応の時間差も捉えられる。1～5は隆帯、6は沈線によるT字状文を描き、綾杉状、斜线条線、刺突列文が充填される曾利Ⅳ式土器である。曾利Ⅳ式以外の様相としては、沈線による曲線文の7、連弧文土器最末期の様相を示す8、10、9は口縁部に横位渦巻文と胴部には縦位の磨消縄文を施し、胴部幅広の磨消縄文を持つ11、12が同時期と考えられる。加曾利E式系の共伴が少ないために正確な対比が行えないが9、11、12の特徴から加曾利E3新式期の可能性がある。

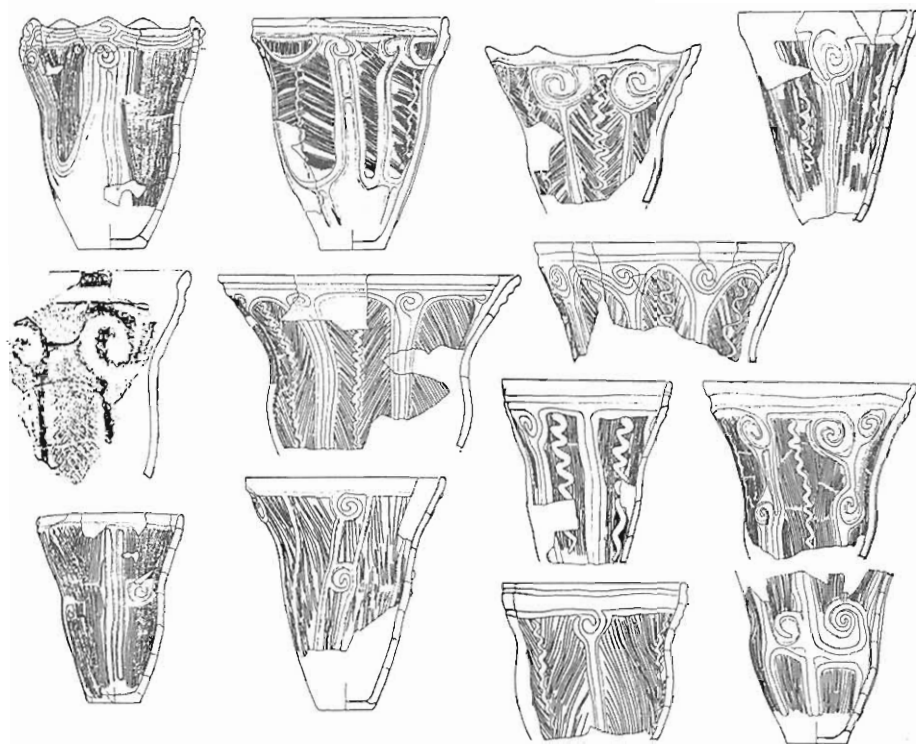
13号住は32号住よりも古い住居址のようであるが、内容は曾利Ⅳ式を含むセットとして共通する点が多い。13号住には25、28のような曾利Ⅲ式に近いものが混ざるが、27の埋甕は曾利Ⅳ式の可能性がある。32号住の埋甕には17の曾利Ⅳ式と18の新戸・原山型土器（折衷形）と呼ばれるものが出土している。

埋甕と覆土の層位差を見ると、32号、34号では新戸・原山型土器と曾利Ⅳ式との層位差を示す可能性がある。但し32号には17の曾利Ⅳ式の埋甕もあり、両者の時間差を認めるとしてもその差は極めて短いといえよう。

6号住からは口頸部に渦巻つなぎ文あるいは縦位懸垂文の頭部と接続する渦巻文を施す資料が単純に出土しており、13号、32号の例も含め尾崎遺跡の一つの特徴を成す。類例は山梨頭無4号住のセット中にも認められ、尾崎遺跡の曾利Ⅳ式土器群は、総体的に頭無4号住に最も近いといえよう。一方尾崎34号のセット中にはこの種のものが存在せず、文様推移という観点では6号（渦巻つなぎ文）から34号（T字状文）という変化を考えることもできる。しかし現在のところこの文様差を各単純に示す形で追認できる他資料はみられず、一応頭無4号住、尾崎13号、32号などの共存するあり方をもって、同一時期（同一型式）内における土器文様の二者



第6図 山北町尾崎遺跡出土土器群



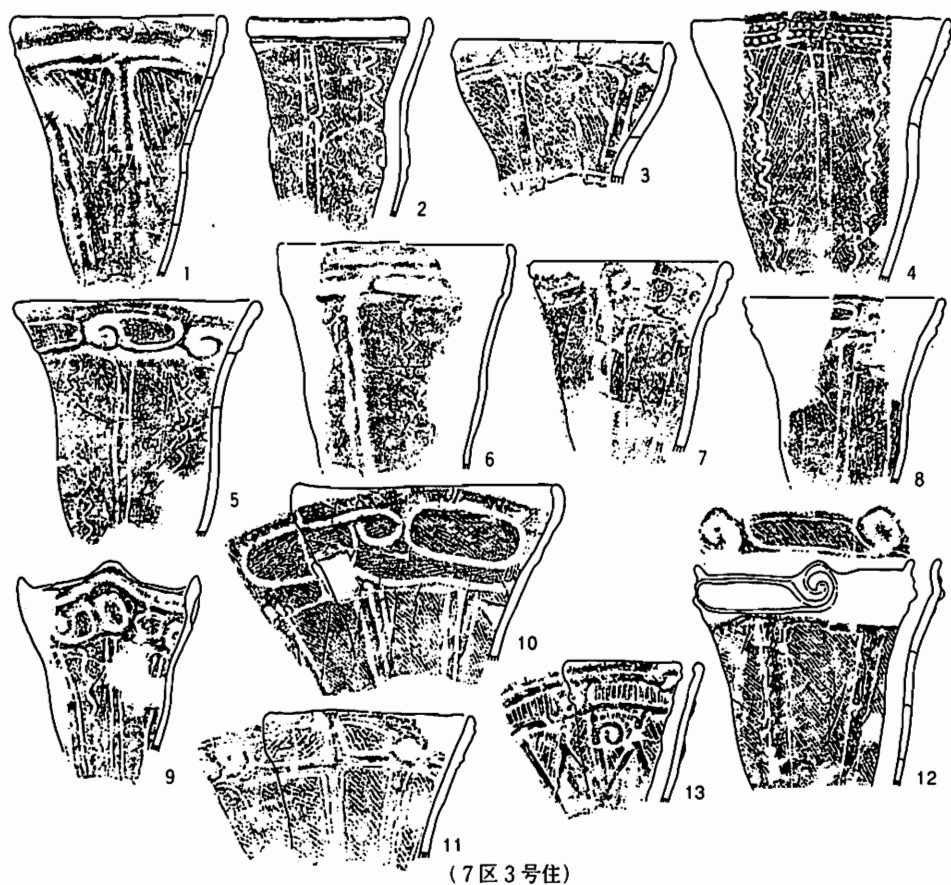
第7図 尾崎遺跡出土「尾崎型文様土器」

として捉えておきたい。そのうえで今後の研究上の利便を考えると尾崎6号住ほかに特徴的な渦巻つなぎ文を「尾崎型文様」として呼称し分けることも必要と考える（第7図参照）。

さて神奈川県内においてはこの尾崎遺跡資料の出現以降曾利IV式的良好なセットを示す出土例はほとんど認められなかった。山梨県に近い津久井郡域でも調査例はあるものの中期後半期の様相は連弧文土器段階以降の資料が極めて乏しく、資料として断片的に出土する状況であった。冒頭にも述べたように尾崎遺跡はその地理的位置から、曾利IV式土器主体の分布東限であったという仮説が提起されるところである。改めて曾利IV式並行期の空白部分を埋めるべき神奈川県内の土器様相を再検討する必要性が生じることとなった。

このような研究現状の中で1997年厚木市及川中原遺跡の報告書が七梓された（北川1997）。及川中原遺跡では7区3号住、8区6号住に典型的な曾利IV式土器が認められ、それらと等量の在地形土器が出土している。待望の曾利IV式並行期の土器資料といえる。

第8図に示した7区3号住からは多くの個体が出土しており、1～4はT字状区画を持ち、区画内に綾杉状文を施文する1、4、櫛歯条線文を施す2、斜行沈線文を施す3があり、特に隆帯区画を持つ1が曾利IV式典型例といえる。これに共伴する在地形土器は、5～12に見る口縁部横位渦巻区画と渦巻文を持つ土器群であり、胴部文様は縦位沈線（隆線）区画と条線文を施す5～9と、縦位磨消縄文帯を描出する10～12がある。5～9は折衷形（新戸・原山型土器）



第8図 厚木市及川中原遺跡出土土器群

と呼んでいたものであり、10～12は筆者が加曽利E3新式と呼称するものである。

8区6号住では14～16のT字状区画を持ち、区画内を綾杉状文・条線文と縦位波状沈線を描くものがあり、隆帯区画の14、15が曾利IV式典型例といえる。これに共伴する在地形土器は17、18、22の連弧文終末期の土器と、19～21の横位渦巻区画と胴部磨消縄文が施される土器がある。

以上のように及川中原遺跡資料は県央部では希少な曾利IV式土器と、新戸・原山型土器（折衷形）と、口縁部文様帯を持つ加曽利E3新式及び連弧文系終末期の土器との四者共存という状況を示していることとなる。

尾崎遺跡と比べて、在地形土器の割合が高い点は県央部に位置することに理由が求められよう。そしてこの先、相模川対岸（東岸）の相模原台地、座間丘陵の遺跡群での曾利IV式土器は冒頭の早川天神森3号住のようにごく断片的な出土となってしまうのである。

なお尾崎型と呼んだ口頸部渦巻つなぎ文系曾利IV式がみられない点は注意しなければならない。尾崎型が時間的に先行すると考えるには共伴する加曽利E式系土器から見て無理がありそうに思える。むしろ及川中原での曾利IV式土器が、尾崎34号住のようなT字状文主体のあり方と同様と捉えれば、別途尾崎型が山梨県方面との分布圏を有する地域的土器様相として考えることも必要となるかもしれない。この点については当面の研究課題としておきたい。

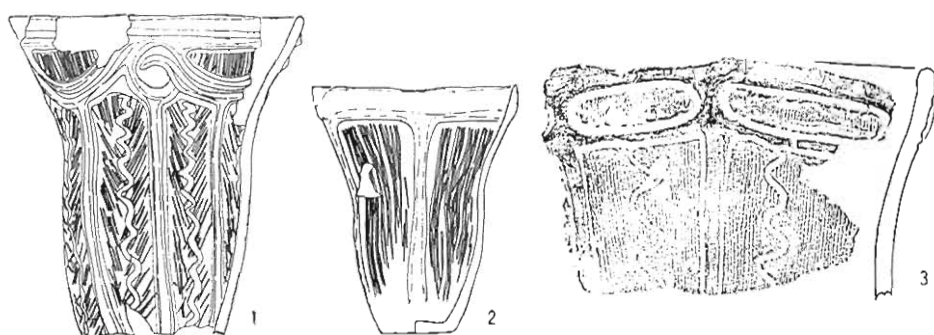
神奈川県内の資料分析として最後に津久井町大地開戸遺跡資料を見てみたい（河野・伊沢1995）。第9図に示したJ25号住では1の埋甕は新戸・原山型土器であり、覆土中より2の隆線によるT字状文を描く曾利IV式土器と、3の新戸・原山型土器が出土している。この組み合わせは及川中原遺跡と同一である。

J7号住では8の連弧文土器が埋甕にあり、覆土中からは4の加曽利E3新式、5の新戸・原山型土器そして6の口縁が内湾するという変形した尾崎型土器、7が沈線施文の曾利IV式土器というあり方を示す。

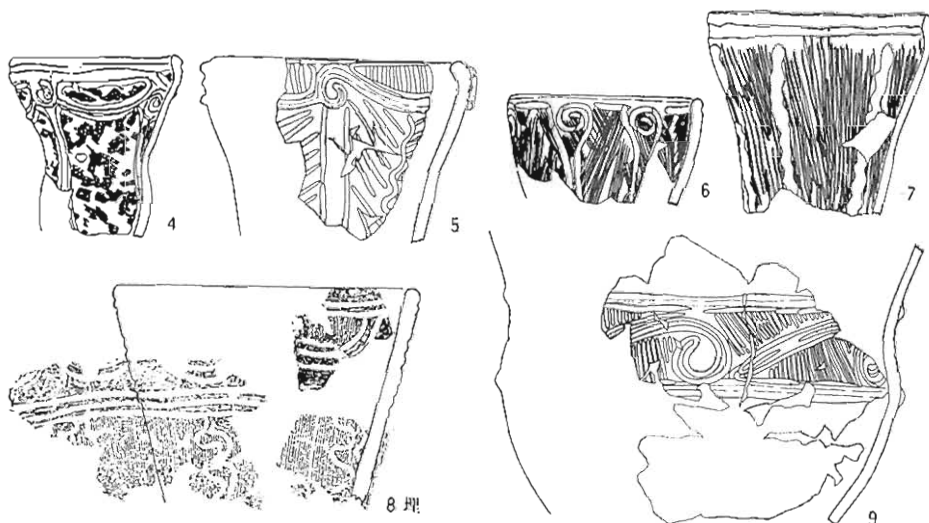
J8号住では13が埋甕であり、10が沈線施文の曾利IV式土器、11が口縁部無文帯が異常に広い変形した曾利IV式土器であり、12は加曽利E3新式土器、その他の破片類は曾利IV式が多い。現在のところ尾崎遺跡に次いで曾利IV式土器のまとまった住居址資料といえる。

以上大地開戸遺跡の曾利IV式土器及び並行期の土器様相を見ると、尾崎遺跡のような曾利IV式土器の大量な出土状況は示していないことがわかる。丹沢山塊の北側（大地開戸）と西側（尾崎）とのあいだでの曾利IV式の受容構成に差があるのであろうか。J7号、J25号の断片的な資料から在地の並行期土器を考えてみると、すでにこの地域に到ると加曽利E3新式の磨消縄文土器あるいは連弧文のくずれがみられる終末期の土器等の波及はほとんどみられず、及川中原遺跡まではなお磨消縄文土器が存在することと比べて興味深い地域相を示している。そして新戸・原山型土器との共存はJ7号、J25号から十分に窺うことができ、及川中原遺跡と類似の様相として捉えられるのである。

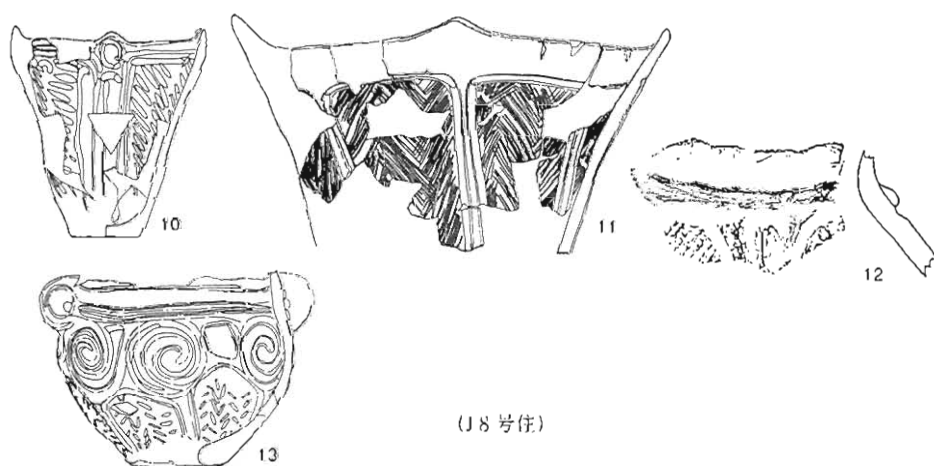
かくしてこれまで分析した神奈川県内の早川天神森3号、尾崎遺跡、及川中原遺跡、大地開



(J25号住)



(J7号住)



(J8号住)

第9図 津久井町大地開戸遺跡出土土器群

戸J25号, J7号, J8号のあり方からは, 過去我々が呼称していた加曽利E式と曾利式の折衷形—新戸・原山型土器, 加曽利E3新式土器(幅広の磨消縄文土器), 連弧文系終末期の土器と, 曾利IV式との並行関係が推定されることとなる。

しかしここで大きな問題点となるのが, 第5図に示した山梨頭無・柳坪の編年の中での頭無9号と柳坪A8号段階においても新戸・原山型土器と呼びえるものが存在していることである。

そもそも折衷形土器の出現は曾利I式以降, 加曽利E式土器との接触地帯に認めることができ, 厳密には各期に対応して折衷形の存在が予想される。そしてその様相が顕著になるのが連弧文土器出現以降, 曾利Ⅲ式並行段階であり, あくまで曾利IV式以前という認識が固定していた。頭無9号, 柳坪A8号等にみられる口縁部横位楕円区画帯と縦位沈線あるいは2条の沈線による縦位無文帯のあり方等は曾利Ⅲ式並行の折衷形の解釈に相当するものであった。

今回の曾利IV式並行期土器の分析により, 曾利IV式全期を通じて新戸・原山型土器が伴うかは今後の課題としても, その一部には並行することが確実になってきた。関東西南部及び山梨県域においては, 筆者も含めて曾利IV式のメルクマールとして口縁部文様帯の喪失化を強く意識してきた経緯から, 曾利IV式を極めて単純に捉えてしまう傾向があったといえよう。その結果, 隣接諸型式も同様な変化を生むであろうという推定にもとづき口縁部文様帯を持つ加曽利E3式, あるいは折衷形である新戸・原山型土器と曾利IV式土器のあいだに, 時間差を意識する解釈を生んだ一面を否定できない。分析からは加曽利E式系統での口縁部文様帯の喪失化に対して曾利式系統での口縁部文様帯の喪失化の方がより早く開始した可能性が高く, 曾利IV式期に両者が併存し, やがてその動きが加曽利E4式出現へと影響を与えたと推定されてくるのである。今後の問題点として, 改めて南西関東—山梨をつなぐ新戸・原山型土器の系統と型式細分が課題となろう。

引用文献

- 岡本孝之ほか 1977 『尾崎遺跡』(神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告書13)
- 浅川利一・戸田哲也 1970 「東京都町田市八幡平遺跡調査報告」『多摩考古』第10号
- 浅川利一・戸田哲也 1971 「町田市玉川学園清水台遺跡緊急発掘調査略報」『文化財の保護』第3号
- 神奈川考古同人会 1980 「土器資料集成図集」『神奈川考古』第10号及び発表レジメ
- 神奈川考古同人会 1981 「シンボジウム縄文時代後半の諸問題」『神奈川考古』第11号
- 岡本孝之ほか 1983 『早川天神森遺跡』(神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告2)
- 戸田哲也 1998 「南西関東における加曽利E式末期の土器様相」『列島の考古学—渡辺誠先生還暦記念論集—』
- 大上周三ほか 1988 『新戸遺跡』(神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告17)
- 藤森栄一編 1965 『井戸尻』中央公論美術出版
- 末木 健 1975 『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』山梨県教育委員会
- 北川吉明 1997 『及川中原遺跡』国道412号線遺跡発掘調査団
- 河野喜映・井沢 純 1995 「大地開戸遺跡」『青野原バイパス関連遺跡』(かながわ考古学財団調査報告5)